

フレディ・ビュアシュを見送る

—FIAFローザンヌ会議報告

岡田秀則

Hiddenori Okada

第75回にあたる2019年の国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)年次会議は、4月7日から13日にかけてスイスのローザンヌで開催された。今年の会議が、シネマテーク・スイスをホストとしてこの地で行われるべき理由はいくつかあった。まず挙げなければならないのは、ローザンヌ市から15kmほど北にあるパンタという小村に、映画のフィルムやデジタル素材、ノンフィルム資料を収蔵する総合的な保存施設がこの度ようやく完成したことである。この施設は、2010年に着工しながらもスイス連邦政府の予算繰りの問題で工事が長期間中止となり、半分でしかかったまま昨年まで完成を待たされたものである(この顛末と保存施設

設の概要、そして同館のノンフィルム資料については「NFCニューズレター」120号掲載の拙文「シネマテーク・スイスの現在」をご覧ください)。それだけに、この正式な落成は同シネマテークにとってとりわけ大きな意味を持っている。

そしてもう一つは、創立間もない1951年から45年にわたってシネマテーク・スイスの館長として活躍したフレディ・ビュアシュがFIAFの新たな名誉会員になった旨が公式に発表されたことである(もう一名、英国の帝国戦争博物館を支えた名フィルムアーキビスト、ロジャー・スミザーの名誉会員入りも同時に祝われた)。同シネマテーク現館長でFIAF会長のフレデリック・メールの

言葉に続き、スタッフに抱きかかえられて壇上に登った94歳のビュアシュは、アラン・タネールやクロード・ゴレッタなど1960年代以降のスイス映画の興隆を支え、ジャン＝リュック・ゴダールの短篇『フレディ・ビュアシュへの手紙』(1981年)の題名にもなった伝説的な人物である。すでに引退して年月の経った長老だけに、公の場に現れることは稀になっていたという。

また、ローザンヌは、国際オリンピック委員会(IOC)の本拠地として「オリンピックの首都」とも呼ばれる都市である。よって、当館がこの11月26日から開催する上映企画「オリンピック記録映画特集—より速く、より高く、より強く」について、上映素材の主な提供先であるIOC傘下のオリンピック文化遺産財団と直接話し合いを進めることのできる絶好の機会にもなった。なお、同財団はFIAF準会員団体でもあり、本会議のオープニング式典は、同財団の管轄するアーカイブ資料や映像を有効に活用したレマン湖畔のオリンピック博物館で催された。

シンポジウム—立ち止まって考える

今年のシンポジウムのテーマは「フィルムアーカイブの過去から未来へ」というかなり間口の広いものだ。現在、各国のフィルムアーカイブはさまざまな難題に直面しているが、今回は特定の主題を掘り下げるのではなく、まずは一旦立ち止まり、歴史を遡るという行為も含めて映画アーカイブの現在地を確かめようという趣旨と見受けられた。会場は、1981年以来シネマテークの本拠地となっている、20世紀初頭に建った美しい洋館「カジノ・ド・モンブノン」。過去にシネマテーク・スイスは1954年、1979年と2度の会議受け入れを行っているが、ここを会場とするのは初めてである。

セッションごとに、「可能な未来」「歴史の教訓」「新たな試練と地平」「専門分野に特化したアーカイブ」「地政学的な検討」「復元:その倫理と実践」「映画の上映と流通」「フィルムアーカイブのコミュニティ」といったテーマに分けられ、各国の発表者から多様な論点が提示された。

フィルムアーカイブ組織の歴史をめぐる発表では、世界各地の映画保存機関が実にさまざま



会場となったシネマテーク・スイスの本拠地カジノ・ド・モンブノン



パンタの保存施設で展示されているスイス製ボレックス・カメラ



パンタのフィルム収蔵庫

なバックグラウンドから生まれたことが改めて浮き彫りになった。例えば、バーベルスベルク大学のアレクサンダー・ツェラーの発表によれば、ドイツでは、初の国立の映画保存機関(帝国フィルムアルヒーブ)の創立はナチ政権成立後の1934年1月30日、館のオープンは翌年2月であった。やがて1938年にはプロパガンダ省に移管され、第二次世界大戦の勃発とともに組織のミッション自体が変容を被るが、発表内で上映された映像には、到着したフィルムを手際よく受領して検査するスタッフの日常が紹介され、この組織の本来の理想を垣間見ることができた。

またフィルムアーカイブは、国公立の専門的な保存機関として生まれた組織ばかりではない。チネテカ・ナチオナーレ(イタリア)のダニエラ・クッロは、ローマでは映画学校(国立映画実験センター)がフィルムアーカイブの母体であったことを示し、シネマテカ・ウルグアヤ(ウルグアイ)のベアトリス・タデオ・フィからは、中南米では、パリのアンリ・ラングロワの支援のもと、シネクラブ活動から発展した機関もあることを伝えた。なおモンテビデオにあるシネマテカ・ウルグアヤは、日本公開もされたフィクション作品『映画よ、さようなら』(フェデリコ・バイロー監督、2010年)の中では哀れにも閉館の憂き目に遭っていたが、実際のシネマテカは昨年新築の建物に移転し、上映事業も改めて強化されたという。さらに、大学のシネマテーク(フランス)、戦時レジスタンス映像のアーカイブ(イタリア)、ユダヤ民族の映像アーカイブ(イスラエル)など、分野に特化した組織の成り立ちや現状を聞くことができたのも得難い機会であった。

当然ながら、この時代においては、映画のデジタル化にまつわる発表も欠かすことはできない。シネマテーク・ケベコワーズ(カナダ)におけるアナログビデオのデジタル化の試みや、シネマテーク・ド・トゥールーズ(フランス)が豊富に所蔵している非フィルム資料のデジタル化も、当館も直面しているまさに現代的な課題というよりない。

輝けるスイス映画——ビュアシュの遺産

昨年から今年にかけて、スイス映画は重要な人物を一気に失った。おそらくいちばん知られ

ているのは俳優ブルーノ・ガンツだが、昨年11月には監督のイヴ・イエールサン、今年2月にクロード・ゴレッタ、あとフレディ・ムラー組の名撮影監督ピオ・カラーディもこの元日に死去した。1960年代の新しい映画運動、いわゆる「ヌーヴォー・シネマ・スイス」を牽引したのはフランス語圏スイスの映画だが、中でも5人の監督たちの作った製作会社「グループ5」が知られる。ゴレッタの死去のみならず、筆頭格のタネールもすでに引退、その栄光も徐々に薄らいでいるが、ビュアシュが先導したこの映画運動をリマインドするように会議開催を記念して特別上映されたのが、「グループ5」の一角である監督ジャン＝ルイ・ロワの『シャンディゴールの見知らぬ男』(1967年、日本未公開)であった。

上映会場は、1928年に建造され、一度は閉館しながらもローザンヌ市やシネマテーク・スイスの協力により復活、今もネオンの劇場看板や二階席を持つ映画館「キャピトル」。『シャンディゴールの見知らぬ男』は2015年の復元版で、核兵器無力化装置を発明したミステリアスな科学者を狙って米ソのスパイたちがコミカルに入り乱れるという面妖な一本である。不思議なことにセルジュ・ゲンズブールがスパイ団の親玉として出演、歌も披露しているが、スパイ映画というジャンルを解体してもう一度手作業で組み立てたがごときおかしい味わいがある。壇上に呼ばれたロワは



1928年建造のキャピトル劇場



『シャンディゴールの見知らぬ男』上映前、ジャン＝ルイ・ロワ監督を迎えて

今も健勝であり、カンヌほか国際映画祭に同作が出品された当時のことを悠然と語った。

なお、筆者が会議の途中でローザンヌを去ったすぐ後のタイミングではあったが、今年のFIAF賞の受賞者、近郊の町ロールに暮らすジャン＝リュック・ゴダールが会場に現れたことは、間違いなくこの会議のクライマックスとなった。直前キャンセルが多いというゴダールにとっても、この機会だけはビュアシュへの真の敬愛を示す場となったようだ。

エピローグ

それから遠くから、シネマテーク・スイスは、フレディ・ビュアシュが5月28日に死去したことを世に伝えた。よって、彼がFIAFの名誉会員として過ごした期間は非常に短かったことになる。だが、1960年前後、路線対立からFIAFを脱退したアンリ・ラングロワが最後までFIAFと和解し得なかったことを私たちが知っている以上、この会議において、無二の盟友としてラングロワに同伴したビュアシュに与えられたこの名誉会員の資格は、少なからぬ歴史的意味を持っている。映画保存界最後の“ロマン主義者”の退場を、この場所に集ったFIAFコミュニティ全体が、いつまでも終わらない拍手で見送った。

次回2020年のFIAF会議は、4月20日から24日までUNAMフィルモテカをホストとしてメキシコシティで催される予定である。



(国立映画アーカイブ主任研究員)